

IV 成果と課題

英語を学習する過程で、児童が「英語を難しいと感じて嫌いになった。」「同じことばかりの繰り返して授業がつまらなくなった。」ということにならないようにしたい。「英語が好き」と言える児童を育てたいという思いをもって研究を進めてきた。そのために、児童の思いや考えを伝え合うことのできる言語活動を工夫したり、他の教育活動など学びにつながるのある単元構成を工夫したりした。さらに、少人数で生活する本校の児童が、これから先に出会う様々な人々と自分からつながろうとする人になって欲しいという願いから、地域のよさを実感し、広い世界に目を向けることができる手立てについて考えながら研究を進め、次のような成果を得ることができた。

1 研究の成果

(1) 仮説①について

① 単元や発達段階の特性を踏まえて言語活動を工夫することにより、児童は、自分の思いや考えをもち、それを伝え合おうとするであろう。

発達段階の特性を踏まえて、低学年では、自分の本当に好きな色や果物について、ゲームを通して楽しく話したり聞いたりすることから始めた。その結果、友達や先生に好きな物を伝えたい、相手の好きなものを聞きたいという相手意識をもって、何度もやり取りをしようとする姿や、本当に自分が好きな物の英語表現を知り、自信をもって相手に伝えようとする姿が見られた。(表1)

中学年では、好きな物や場所の紹介やクイズの出し合いなど、相手に配慮をしながら自分の思いを伝え合うことのできる言語活動を設定した。その結果、相手に分かりやすく伝える工夫をする姿や自分のことを知ってもらい、相手のことを知る喜びを感じている姿を見ることができた。(表1)

高学年では、これまでの学習を踏まえて、インタビュー活動や劇作りなど、他者に配慮して情報を取捨選択しながらやり取りを行うような言語活動を設定した。その結果、既習表現を使って相手と会話を続ける楽しさを感じたり、「こんなことを言いたい。」という自分の思いを膨らませながら、新しい英語表現を自ら獲得したりする姿が見られた。(表1)

図1 「英語で会話をするのは好きですか」

(第3～6学年対象)

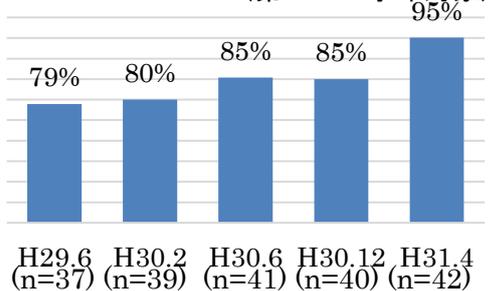


図1は、設問「英語で会話をするのは好きですか」に対する肯定的回答の経年の変化を表したものである。年度を重ねるごとに、割合が高くなっている。このことから児童は、授業の中で行われている本当の自分の思いや考えを伝え合う言語活動に慣れ親しみ、英語でやり取りをすることに楽しさを感じていることが推測される。

また、今年度7月に行った全校児童への英語アンケートの結果、「分からないことや難しいことでも、どうかして相手に伝えようと思いましたか」と「相手の英語で

分からないところがあっても、最後まで聞こうとしましたか」に対する肯定的回答がいずれも92%に達していた。

以上のことから、単元や発達段階の特性を踏まえて言語活動を工夫することで、本校の児童に、英語で自分の思いや考えを伝えたり相手のことを理解したりしようとする態度が育っていると考える。

表1 児童の振り返りから

- ・ えいごで人のすきなことをきけるようになった。(2年)

【すきな果物を聞き合う言語活動を通して】

- ・ ぼくがすきなペア(梨)とタンジェリン(みかん)はむずかしくておしえられなかったけど、こんどはそれをおしえたいです。(2年)

【幼稚園児と英語で交流する言語活動を通して】

- ・ 今日、学校の先生と、ほかの先生にもインタビューをして、すきなものが同じだったりちがったりして楽しかったです。(3年) 【すきな物をインタビューする言語活動を通して】
- ・ 私のふるさと総社を、Ben さんに伝えるように分かりやすく紹介したいです。(4年) 【総社のお気に入りの場所を紹介し合う言語活動を通して】
- ・ 外国の人と会話したとき、楽しいと思えるくらい話せた。(6年) 【外国人へインタビューをする言語活動を通して】
- ・ インタビューができるようになったけど、ことわるときや困ったときの言い方も覚えたいです。(6年) 【外国人へのインタビューをするための言語活動を通して】

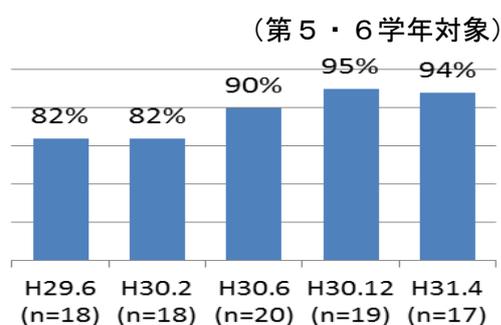
(2) 仮説②について

② 学びのつながりを意識して単元(新本オリジナル)を構成すれば、本物で必然性のある言語活動が生まれ、児童は主体的に学習に取り組むであろう。

新本オリジナルの単元構成として、学びのつながりがある教育活動と外国語活動・外国語科を関連させた単元ゴールを設定することにより、英語で話す必然性が生まれ、その結果、児童自らが単元ゴールに向かい、主体的に言語活動に取り組む姿が多く見られた。

高学年では地域の伝承文化である赤米に焦点を当て、都市間交流事業である赤米サミットでその特徴やよさをより多くの人々に伝えるという本物の言語活動を単元ゴールとして設定した。その結果、せりふを覚えるだけの活動ではなく、それまでの学びを生かして言葉を創り出したり、分からない表現を聞いたり調べたりする主体的な姿が多く観察できた。

図2 「英語の授業は楽しいですか」



平成26年に文科省が行った、小学校5・6年生の児童に対するアンケートの中で、「英語が好き、どちらかといえば好き」と回答している児童が70.9%だったことに対して、本校では英語の研究を始めて以来、多くの児童が「英語の授業が楽しい」と回答している。これは、児童が英語の授業を楽しみ、意欲をもって参加している実態を表していると考えられる。また楽しさの質は、歌やゲームの楽しさだけではなく、「やっていくうちに楽しくなってきた。」「最初は自信がなかったけど最後は達成できて英語が好きになった。」などといった、単元ゴールに向かって活動することで味わえる、達成感のある楽しさが多く見られるようになった。(表2)

このように、児童とともに設定した単元ゴールに向かって毎時間の言語活動を行うことで、活動に必然性が生まれ、「もっとこんなことを話したい。」「次はこんなこともやってみたい。」という児童の主体的な姿が見られた。

表2 児童の振り返りから

- ・ えいごをつかっていっぱいクイズをだしたい。(2年) 【幼稚園と英語で交流活動を行う単元構成を通して】
- ・ あいさつのべんきょうで学んだことをいかして、ダニエル先生にすらすらとじこしょうかいをいうようにがんばりたいです。(3年) 【小中連携担当教員に自己紹介をする単元構成を通して】

- ・ 先生にインタビューするためには、リアクションの数をもっとふやさないといけないと思いました。(3年) 【先生に好きな物をインタビューする単元構成を通して】
- ・ 今日、先生たちにインタビューをして、先生のすきなものがわかってよかったし、5人もインタビューができてうれしかったです。(3年) 【先生にインタビューをする単元構成を通して】
- ・ Ben くんにふるさと総社のことをたくさん知ってもらいたいです。(4年)
- ・ やっていくうちに楽しくなって、リアクションもとれるようになったし、発音もうまくなって家でも使えるようになったからうれしい。(4年) 【留学生にふるさと総社を紹介する単元構成を通して】
- ・ 最初はゆっくりじゃないと言えなかったけど、今はスラスラ言えるようになった。英語のことを急にふられてもすぐに言えるようになった。外国の人と会って英語が言えるようになった。(5年) 【留学生に日本文化を伝える単元構成を通して】
- ・ 英語の劇をしていて、英語のせりふを考えるのは初めてだったから、最初は自信がなかったけど本番でいきいきと発表ができたのでよかったなと思いました。そこからぼくは英語がきらいだったのから少しずつ英語が好きになりました。(6年) 【赤米サミットで英語劇を発表する単元構成を通して】

(3) 仮説③について

③ HRT (学級担任), ALT (外国語指導助手), 小中連携担当教員, ゲストティーチャーなど様々な人々と関わることによって、コミュニケーションの楽しさを味わい、より広い世界に目を向けるであろう。

どの学年でも前年度までに、他の教育活動と関連付けた外国語活動・外国語科を行っており、担任だけではなく ALT や小中連携担当教員, 高校生や大学生, 地域の方々や留学生と触れ合う授業を継続的に体験している。そのため、英語の授業を通して地域の行事や日本文化への関心を深めたり、世界の人々のくらしを積極的に調べたりするなど、他の活動にも興味を広げている児童の姿が見られるようになったと考える。図3は、設問「英語の学習をすることで他のことにも興味をもちましたか」に肯定的回答をした3年生から6年生の児童の割合を表したものである。図4は設問「英語を使って外国の人と話がしたいですか」に肯定的回答をした児童の割合を表したものである。本校では、低学年ではクラスメイトや先生などの身近な人々と、中学年では地域と、高学年では世界と英語でつながろうとする児童を目指している。図4からは、児童が学年を経て関わる世界を広げていくにつれ、外国の人とのコミュニ

図3「英語の学習をすることで他のことにも興味をもちましたか」(第3～6学年対象)

(n=42) H31.4

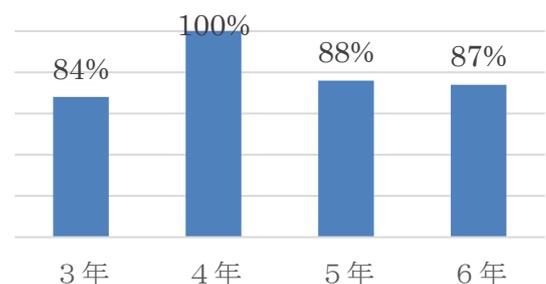
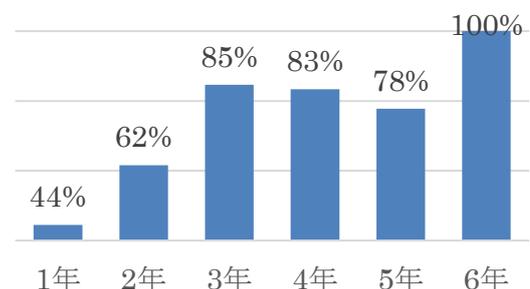


図4「英語を使って外国の人と話がしたいですか」(全学年対象)

(n=64) H31.4



ケーションにも目が向くようになってきていることが分かる。

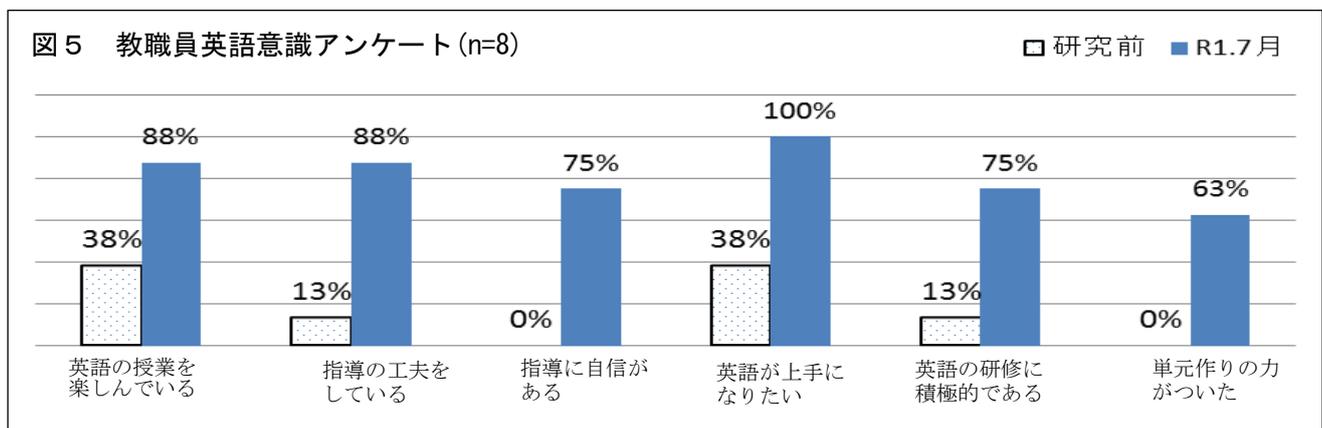
表3からは、英語を通して様々な人と関わり、伝え合う喜びを味わっている児童の様子が見られる。また、英語で身に付けた、様々な人々と関わろうとする力は、日本語でのプレゼンテーションや発表でも生かされ、自信をもち堂々と自分の思いを伝える姿が見られるようになってきている。

表3 児童の振り返りから	
・ ようちえんさんといろんなことがたのしかったです。3年生になってもようちえんさんとえいごをしたいです。(2年)	【1年生、幼稚園との関わりを通して】
・ えいごをようちえんじにおしえることができうれしかったです。ようちえんじの中ではずかしい人もいたけどがんばってやっていたのがすごいなおもいました。もっといろいろなえいごをおしえてあげたいです。(2年)	【1年生、幼稚園との関わりを通して】
・ オーストラリアに行ってみたいと思えた。(4年)	【留学生との関わりを通して】
・ Benくんはこま、けん玉、お手玉、竹とんぼのどれができるか知りたいです。(5年)	【留学生との関わりを通して】
・ 英語は難しいけど、インタビューは楽しい。そしてその達成感はとてもいいもの。英語は常日頃から使うことが大事だと思いました。(6年)	【外国人観光客との関わりを通して】
・ 英語を学んだことで、初めて会った外国人とふれ合うことができうれしかったです。これからも、この英語を使って、世界の人とふれ合いたいです。(6年)	【外国人観光客との関わりを通して】

上記のような成果が児童に見られたとともに、研究を進める教職員の指導力にも向上が見られた。

一つ目はカリキュラム・マネジメント力の向上である。学習指導要領改訂の基本方針の中に「各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進」が掲げられている。本校でも外国語活動・外国語科を進めるにあたり、他教科等との横断的な学習を充実させるため、学校全体として、実態把握、時数配分、必要な人的・物的体制の確保などのカリキュラム・マネジメントに努め、授業者はその力を伸ばすことができている。

二つ目は、教職員の外国語活動・外国語科への意欲の向上である。図5から分かるように、英語の研究を進めてきた現在、多くの教職員が英語の授業を楽しみ、指導力に自信をもつことができたという意識を向上させている。これは、全教職員で共通理解を図りながら、協同的に研究を進めてきたことや、研究授業の度に、参加者全員で成果と課題を明確にする作業を行い、講師の福原史子先生から次の授業に生かすことができる適切な助言をいただけたことに起因すると考えられる。



2 今後の課題

本校で積み重ねてきた実践を生かしながら、新学習指導要領による外国語活動・外国語科を円滑にスタートさせるために、次の二つの点における課題を挙げ、その解決に向けて取り組みたい。

一つ目は、「読むこと」「書くこと」についてである。高学年では「聞くこと」「読むこと」「話すこと〔やり取り〕」「話すこと〔発表〕」「書くこと」の五領域別に目標が設定され、その実現を目指した指導・過程を通して、資質・能力を一体的に育成することを目指している。

本校の研究においては、自分の思いや考えを伝え合う手段として、「話すこと」「聞くこと」の指導に重きを置いてきたため、「英語でもっと話したい。」「伝え合いたい。」という児童の姿は多く認めたが、「英語を読みたい。」「英語を読むことが好き。」という児童の育成には十分至っていない(図6)。また、「書くこと」については、本紀要の実践記録22・34・40・41ページの記載内容や図7から、書く必然性のある活動には抵抗感なく書こうとする児童が育っていることが推測される。しかし、6年生の実践記録から見られるように、自分の思いや考えを書こうとする気持ちが高まるほど、英語表現は難しくなり、書く量の多さや誤字の訂正が書く意欲の低下につながるものが懸念される。新学習指導要領において求められる力や、中学校への接続を踏まえた「読むこと」「書くこと」についての研修を深め、音声による言語活動を十分に行った上で、児童の意欲を低下させることなく、文字指導に移行できる指導法を追究していきたい。

図6 「英語の言葉や文を読むのは好きですか」

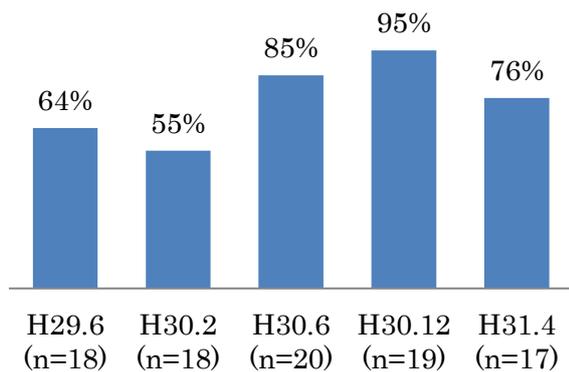
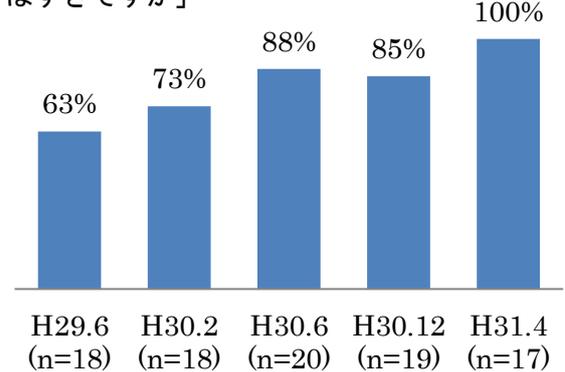


図7 「アルファベットや英語の言葉をかくのは好きですか」



二つ目は、評価についてである。新学習指導要領では、各教科とも「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に基づき学習評価を行い、外国語科においても、特性及び発達の段階を踏まえながら、数値による評価(評定)を適切に行う必要がある。

本校の研究では、単元で扱う言語材料をどれだけ正確に使えたかより、どれだけ自分の思いや考えをもって英語を話そうとしていたか、相手の英語を聞こうとしていたかということに重点を置いて評価を行ってきた。そのため、言語活動の中で児童が英語でやり取りをしている様子や、振り返りのワークシートでの記述などから、「思考力・判断力・表現力」の観点が達成されていると判断する評価方法が中心であった。

今後は、これまで中心にしてきた評価方法に加え、新学習指導要領に基づいた適切な評価を行っていく必要がある。そのために、児童の学習の過程や成果をどう評価し、次の指導に生かすかについて研究を続けていきたい。